

ルーマニア語における SVO と VSO の語順

鈴木信吾

Shingo SUZUKI

1. はじめに

近代のロマンス諸語は、一般に SVO (S: 主語、V: 動詞、O: 直接目的語) を無標の語順とする。現代のダキア・ルーマニア語 (以下、単に「ルーマニア語」) においても、文の主要素の配置に比較的大きな自由が認められるものの、主語が表現される場合、少なくとも主節でよく使われるのはやはり SVO の語順である。たとえば、Zafiu は次のように言っている。

引用 1 “In Romanian, the dominant unmarked word order of the body of the sentence is SVO [...]; it occurs in declarative main clauses in which the grammatical subject corresponds to the topic” (Zafiu, 2013, p. 568).

つまり、ルーマニア語における優勢な語順すなわち無標の語順は SVO であり、これは、平叙文による主節中で主語とテーマ¹⁾とが符合する場合に現れる、と言うのである。

一方、1989 年サンティアゴ・デ・コンポステラの国際ロマンス語学会における Dobrovie-Sorin の生成文法のアプローチによる報告 (Dobrovie-Sorin, 1992) を受けて、Renzi は、Greenberg のあげる言語普遍性に依拠しながら、ルーマニア語が統語類型論的に VSO 型に属することを明らかにしようと試みている。その試みは、Greenberg のあげる言語普遍性のうち、主に次の二つにかかわるものである。

引用 2 “*Universal 16*. In languages with dominant order VSO, an inflected auxiliary always precedes the main verb. [...]
“*Universal 17*. With overwhelmingly more than chance frequency, languages with dominant order VSO have the adjective after the noun” (Greenberg, 1963, p. 67).

普遍性 17 によれば、VSO 型言語においては NA (N: 名詞、A: 形容詞) の順が支配的であるという。それに対し、SVO 型言語では NA と並んで AN の順もよく現れる。ルーマニア語は、他のロマンス諸語と比較すると、NA の順を安定させる傾向にある。しかも、16, 17 世紀の古ルーマニア語では、この傾向がさらに顕著である (Renzi, 1991, pp. 21-22; ただし、Niculescu, 1991 も参照のこと)。普遍性 16 では、VSO 型言語は助動詞がいつも主動詞の前にあるとするが、HABEO に由来する助動詞を不定詞のあとに置く汎ロマンス語的な未来と条件法の形成に対し、Renzi は、ルーマニア語の未来と条件法の形はこれと異なり、助動詞を前に置く点を指摘している。こうした分析をとおして、Renzi は、ルーマニア語が VSO 型言語であるとする説が、Greenberg の提唱する言語類型論上の予測にも合致することを示している。

本稿では、ルーマニア語における SVO と VSO の語順を突き合わせながら、何をもって無標の語順と言えるかを考察していきたい。²⁾

2. より広い文脈で使える語順：SVO

すでに述べたとおり、ルーマニア語の SVO の語順の文は、多様な場面や文脈で使用が可能である。この事実は、それが文末から文頭に向けて体系的にフォーカス³⁾を広げていけるという現象からも確認することができる。SVO の文を一つ例にとって、この現象を見てみよう。

- (1) *Ion a spart vaza.*
I. has broken the vase
「イオンは／が花瓶を割った。」

(1)は、平叙文として下降調のふつうのイントネーションを保ったまま、次の一連の問いに適格に答えることができる ([F]) の上にイタリック体で示したのがフォーカスの部分)。

- (2) a. -Ce a spart Ion? - *Ion a spart vaza.*
 「イオンは何を割ったのか？」 [F]
- b. -Ce a făcut Ion? - *Ion a spart vaza.*
 「イオンは何をしたのか？」 [F]
- c. -Ce s-a întâmplat? - *Ion a spart vaza.*
 「何が起こったのか？」 [F]

(2)の問いは、(a)が O (vaza 「花瓶」) を、(b)が O と V (a spart 「割った」) を、(c)が O と V と S (Ion) をそれぞれ尋ねる問いだから、それらすべてに適格に答えられる(1)のような SVO の語順の文は、先行文脈に応じてフォーカスを広げていく、ということが確かめられる。なお、(1)の文は、先行文脈のないところで突然話を切り出そうとするときにも用いられるが、これも、(2c) と同様に、(1)が文全体にフォーカスを広げられることの証である。

一方、ルーマニア語では、SVO と並んで VSO の語順も、先行文脈の支えのない状態で、ふつうのイントネーションを保ったまま用いることができる。

引用 3 “If a sentence announces ‘hot news’, the order can be either VS or SV in case the subject is not topical:

A fugit Popescu în străinătate!
has run P. in abroad
‘Popescu has fled the country!’

Au invadat rușii Afganistanul!
have invaded the Russians Afghanistan
‘The Russians have invaded Afghanistan!’

These sentences are equally good with SV order. If VS order is used, the subjects must be new information” (Farkas, 1981, p. 258).

Farkas のあげているルーマニア語の二例は、どちらも V (a fugit 「逃げた」、au invadat 「侵略した」) が先頭に置かれ、S (Popescu, ruşii 「ロシア人たち」) がそれに続く文である。⁴⁾ VSO の文が SVO と並んで「ホットニュース」を伝えることができる、つまり、文全体にフォーカスを広げることができるということは、SVO と同様に、VSO もフォーカスを体系的に広げる可能性を秘めているはずである。ところが、実際にはこの可能性がないことは、(1)と同じ知的意味をもつ VSO の文(3)に、(2)と同様の先行文脈によるテスト(4)を施してみればわかる。事実、(3)の文は、(4)の一連の問いに対していつも一定の適格さで答えられるとは限らない ((4)における答えで、下に【 F 】の表示のないイタリック体は、本来ならフォーカスに相当するはずの部分)。

(3) *A spart Ion vaza.*
has broken I. the vase
「イオンが花瓶を割った。」

- (4) a. –Ce a spart Ion? –*A spart Ion vaza.
「イオンは何を割ったのか？」
b. –Cine, ce a spart? –??A spart Ion vaza.
「誰が何を割ったのか？」
c. –Ce s-a întâmplat? –A spart Ion vaza.
「何が起こったのか？」 [F]

(4)の一連のテストにより、(3)のような VSO の文には、フォーカスを体系的に広げていく性質のないことがわかる。したがって、多様な文脈でより広く使えるのは (VSO ではなく) やはり SVO の語順の方である。もし、使用できる文脈の範囲がいちばん広い語順を無標とするのなら、他の多くのロマンス諸語がそうであるように、ルーマニア語も SVO を無標の語順とする、と言えることになる。

ところで、ルーマニア語の SVO や VSO の文は、ある条件下で、直接目的語 O を前置詞 (pe) 付き対格にしたうえで、それと同一指示の接語代名詞で重複させる現象がある。次の二つの文は、いずれも前置詞付き対格の O (pe Petru 「ペトルを」) が接語重複 (I) を見せる例であるが、(5)が SVO、(6)が VSO の語順に置かれている。

- (5) *Mama l-a certat pe Petru.*
the mother him.CL.ACC-has scolded PE P.ACC
「お母さんは／がペトルを叱った。」
(6) *L-a certat mama pe Petru.*
him.CL.ACC-has scolded the mother PE P.ACC
「お母さんがペトルを叱った。」

上の SVO の文(5)に(2)でやったのと同じテストを施すと、結果は(2)と全く同じで、フォーカスが体系的な広がりをもつことがわかる。

- | | |
|---------------------------------|-----------------------------|
| (7) a. – Pe cine a certat mama? | – Mama l-a certat pe Petru. |
| 「お母さんは誰を叱ったのか?」 | [F] |
| b. – Ce a făcut mama? | – Mama l-a certat pe Petru. |
| 「お母さんは何をしたのか?」 | [F] |
| c. – Ce s-a întâmplat? | – Mama l-a certat pe Petru. |
| 「何が起こったのか?」 | [F] |

一方、VSO の文(6)では、文末の要素 O (pe Petru 「ペトルを」) のみを尋ねる(7a)の問いにも満足に答えることができないから、結果は(4)と同じである。つまり、接語重複があったとしても、フォーカスが体系的な広がりを見せるのは (VSO ではなく) SVO の語順の方である、という同じ帰結に落ち着くことになる。使用できる文脈の範囲が広いという意味では、ここでも、やはり(5)のような SVO が無標の語順ということになる。

3. 統語的に見た基本の語順 : VSO

語順の無標性に関しては、Benincà が次のように言っていることに注目しよう。

引用4 “La marcatezza di una frase va considerata in modi diversi, dipendenti dalla prospettiva che viene scelta. Una frase può essere infatti non marcata ‘pragmaticamente’, e con questo si intende che essa può essere adatta ad un numero più alto (teoricamente infinito) di contesti linguistici o di situazioni. Una frase non marcata ‘sintatticamente’ è invece quella in cui l’ordine dei costituenti corrisponde all’ordine che essi hanno nella struttura della lingua che viene ricostruita dalla teoria linguistica. [...] La marcatezza sintattica e quella pragmatica sono le sole pertinenti nella descrizione dell’ordine delle parole” (Benincà *et al.*, 2001, p.129).

「文の有標性は、選んだ視点ごとに異なる方法で考察されてしかるべきである。事実、ある文が『語用論的に』無標であると言うとき、その文は、より多数の(理論的には無数の)言語文脈や場面で適格であり得ると解釈できる。それに対して、『統語論的に』無標である文とは、その文の構成要素の語順が、言語学理論の再構築する言語構造のなかでもっている語順と合致する文のことである。[...] 統語論的ならびに語用論的な有標性だけが、語順を記述するのに関与する」。

Benincà が語順の有標・無標性に統語論的なものと語用論的なものとを区別しているのはイタリア語文法のなかにおいてであるが、この区別は、明らかに個別文法の枠を超えており、ルーマニア語にも当てはまると考えられる。第2節で行ったフォーカスの広がりテストの結果では、使用できる文脈の範囲の広い SVO の語順が無標の語順であると言えることがわかった。しかし、これは語用論的な

結論であり、必ずしも統語論的な結論と一致するとは限らない。そこで、以下では、統語論的な角度から文の無標性がどのようにとらえられるかを見てみよう。

統語的な語順の無標性を考えるに先立ち、引用 1 で Zafiu が、多様な文脈で優勢な SVO の語順は主語とテーマが符合する主節に起こりやすい、と言っていたことを思い出そう。このことは、主節に比べると、従属節はテーマづけの操作を比較的受けにくく、基本的な統語構造をより忠実に反映しやすい、ということを示すもののだとも考えられる。事実、Pană Dindelegan は、アカデミー文法のなかで次のように述べている。

引用 5 “Pentru a stabili tipul de topică sintactică a subiectului, uzul subiectului din principală este mai puțin concludent, dat fiind faptul că, în principală, poziția subiectului este dirijată, în mai mare măsură, prin întrebare / prin organizarea replicii precedente și prin adecvarea noii replici la contextul anterior, *fiind mai puțin controlată sintactic și mai mult determinată textual-pragmatic*. Sau, altfel spus, în principala aflată în poziție frontală de enunț, la poziția de subiect accede, mai des, Tema, enunțul organizându-se în așa fel încât subiectul și Tema să coincidă” (Pană Dindelegan, 2008, p. 362. イタリア体¹の太字は原文のまま)

「主語の統語的な語順のタイプを確定するには、主節での主語の使用はたいして決め手にならない。なぜなら、主節における主語の位置は、統語的な制約をそれほど受けず、それよりもテキスト・語用論的な決まりに縛られるからであり、それゆえ、かなりの程度、問われた内容や前の受け答えの構造とか、新たな受け答えの先行文脈への適合具合とかに左右されるからである。別の言い方をすれば、発話の先頭の位置に現れる主節は、主語とテーマが符合するように発話が組み立てられるため、テーマがより頻繁に主語の位置に収まるのである」

従属節の方が統語的な基本構造を忠実に反映するという観点から見ると、従属節のうちでも、とりわけ接続法を使ったものが興味深い結果を示すことに気が付く。以下、それを見ていく。

次にあげる二つの文は、どちらも接続法による従属節を用いた例であるが、(8a)では、従属節中の直接目的語 (pe Mihai) がその本来の位置に置かれているのに対し、(8b)では、同じ直接目的語が左方転位している(これから先の例文中では、問題とする要素と、それを重複させる接語とを太字で示す)。

- (8) a. *Vreau să-l_i ajuți pe Mihai.*
want.1SG să-him.CL.ACC help.2SG PE M.ACC
「(君には) ミハイを助けてやってほしいんだ。」
- b. *Vreau ca pe Mihai_i să-l_i ajuți tu.*
want.1SG that PE M.ACC să-him.CL.ACC help.2SG you.NOM
「ミハイのことは君が助けてやってほしいんだ。」

形態的な観点からすると、ルーマニア語の接続法は分析的で、接続法を示す標識 *să* と活用した動詞とから成る (上例では *să-l_i ajuți*)。 (8a) では、*să* は、形態的な接続法の標識であると同時に接続詞としての役割も果たしている。一方、直接目的語を左方転位させた (8b) では、従属節は接続詞 *ca* で導かれる

ことになる。この場合、*să* は単なる形態的な標識としての役割を果たすのみである。統語的な観点からこれを一般化すれば、*ca...să* に挟まれた要素は、その従属節中の本来の位置から左方に転位したものであると言える。

ここで、次の例を(8)と比べてみよう。

- (9) a. *Vreau să mă ajute Mihai.*
 want.1SG SĂ me.CL.ACC help.3SG M.NOM
 「(僕は) ミハイに助けてほしいんだ。」
- b. *Vreau ca Mihai să mă ajute pe mine.*
 want.1SG that M.NOM SĂ me.CL.ACC help.3SG PE me.ACC
 「ミハイには僕のことを助けてほしいんだ。」

(9)の従属節中で問題となる位置を占めているのは主語 (Mihai) であるが、(8), (9)で対をなす例文の平行性は明らかである。(8), (9)ともに、(b) の系列で *ca...să* に挟まれているのは、それぞれ直接目的語と主語である。それは、これらの要素が同じように左方に転位しているからだと考えられる。ただし、ルーマニア語の代名詞体系には主格の接語が存在しないため、(8b)とは違い、(9b)のような主語の左方転位の場合には接語による繰り返しが見られない。要するに、(8)の直接目的語 (pe Mihai) と平行して、(9)の主語 (Mihai) も、(a)のように動詞 (*să (mă) ajute*) の後ろが本来の位置であり、(b)の動詞の前という位置は左方転位という操作が加わった結果なのだ、と考えるのが妥当であろう。

(9b)に見るような *ca...să* による主語の左方転位の構造を援用しながら、Pană Dindelegan は、ルーマニア語の主語の基本的位置は動詞の後ろである、という結論に達している。

引用6 “Exceptând câteva cazuri *de topică fixă în antepoziție* [...], precum și uzul frecvent antepus din propozițiile principale, preferințele de topică merg – *pentru subordonată și pentru cazurile de subiect nontematizat* – spre ordinea V-S. S-ar putea invoca și faptul că româna și-a diversificat tipul de conectori subordonatori, creându-și varianta *ca...să*, specializată tocmai pentru tematizările din subordonată, inclusiv pentru așezarea preverbală a subiectului, semn că topica sintactică a subiectului este cea postpusă” (Pană Dindelegan, 2008, p. 362. イタリック体の太字は原文のまま).

「主語の前置が固定している語順の場合 [つまり、主語が疑問詞や関係詞の場合] と、主節でよく起こる主語の前置使用とを除外すれば、語順の選択は — 従属節の場合やテーマでない主語の場合には — V-S の配列に向かう。その証拠として、ルーマニア語が従位連結詞のタイプを多様化させ、ヴァリアントの *ca...să* を創造してきたという事実も援用できよう。このヴァリアントは、主語を動詞の前に出すことも含め、まさに従属節のテーマづけを重点的に担うが、これは、統語上の主語の語順が動詞の後ろにある、ということの証である」

従属節の構造が基本的な統語構造をよく反映しているとするならば、ルーマニア語の統語論的な無標の語順は、Pană Dindelegan の言うように、VSO であるという結論に到達する。このように考察してみると、(9b)の従属節の場合と同様に、次にあげる(10)の主節の場合も、主語 (Mihai) は統語的な基本

の位置に留まっているのではなく、左方に転位しているのだという判断にたどり着く。つまり、(10)の SVO の構文は、(11)で直接目的語 (pe Mihai) が左方転位を受けた OVS の構文と統語的には同列に考えられる、と推論できるわけである。

(10) *Mihai mă_i ajută pe mine_r*
 M.NOM me.CL.ACC help.3SG PE me.ACC
 「ミハイは僕のことを助けてくれる。」

(11) *Pe Mihai_i ă_i ajută tu.*
 PE M.ACC him.CL.ACC help.2SG you.NOM
 「ミハイのことは君が助けてやるんだ。」

ここまで我々が見てきたことを要約すれば、ルーマニア語では、テーマの表されない文 — つまり、レーマのみからなる文 — VSO が統語上の基本にある、と考えられることになる。⁹⁾ ただし、典型的な VSO 型言語ではないので、この語順は決して語用論的に優勢なものではない (Dobrovie-Sorin, 1992, p. 1134, n. 5 参照)。そこで、主語であれ、直接目的語であれ、その文中のいずれかの項をテーマづけたい場合には、そのたびに左方転位という統語手段が使われることになる。テーマにうってつけの要素が主語であることを考えれば、左方転位を経て得られた SVO の出現の度合いがきわめて多くの文脈で優勢になるのもうなずけよう。我々は、また、第 2 節で語用論的な語順の無標性を探るに当たり、文がふつうのイントネーションをもっていることを前提とした。つまり、(1)や(5) (そして(10)) のような SVO の文は、左方転位の操作を受けた構文ではあっても、移動した S と文の残りの部分 VO との間に休止がないことを前提とするものである。同様な休止の不在は、(11)での移動した O と文の残りの部分 VS との間にも認められよう。

4. 左方転位の有標性の磨滅

ここまで、我々は、ルーマニア語が VSO を統語論的に無標の語順とし、SVO はそれに操作を一つ加えてできたものとしてとらえられることを示してきた。その一方で、左方転位の操作を経てできあがった SVO の文の方がずっと多くの文脈で使用可能である、つまり、語用論的に無標であるということも示した。このことは、ルーマニア語の左方転位自体が大きく有標性を磨滅していることを予測させる。事実、ルーマニア語には、左方転位の有標性の磨滅を示す現象がこのほかにも見られる。

まず、ルーマニア語における接語による左方転位構文の使用域 (register) の広さがあげられる。他のロマンス語、たとえば、イタリア語の場合は、左方転位させた要素を接語で繰り返す構文は話しことばに特有のもので、書きことばではむしろ使用が回避される (Serianni, 1991², p. 250 参照)。一方、ルーマニア語では、書きことばにおいても一般に左方転位が頻繁に起こり得る。次にあげる例は、いずれも接語重複をもつ左方転位の文であるが、(12)はアカデミー文法の説明部分から、(13)はある協定

書の条項からの引用である ((13)の和訳のあとに添えたのは同じ協定書中の英語の対訳)。

- (12) *În enunțurile în care predicatul este tematizat intonațional, tema_i*
in the utterances in which the predicate is topicalized intonationally topic-the.ACC
o_i constituie o acțiune (GALR, vol. 2, p. 924)
it.CL.ACC constitutes an.NOM action

「述語がイントネーションによってテーマとなる発話においては、テーマを構成するのは一つの動作である」

- (13) *Obiectul_i contractului îl_i reprezintă stabilirea unei*
objective-the.ACC contract-the.GEN it.CL.ACC represents establishment-the.NOM a.GEN
colaborări între cele două instituții
collaboration between the two institutions

「この契約の目的を成す (=この契約が目的とする) のは、両機関のあいだの協力の確立である (The purpose of this agreement is to establish collaboration between the institutions)」

(12), (13)とも、直接目的語 (tema 「テーマ」、obiectul contractului 「契約の目的」) が左方転位した例である。後ろに残された文は、いずれも、それを繰り返す接語 (o, îl) で始まるが、転位要素と残された文とのあいだにカンマの挿入がないことにも注意されたい。カンマは潜在的な休止を表すはずであるが、これがないということは、転位要素が残りの文と音的に一体化していることを暗に示している、とも考えられる。

もう一つ、ルーマニア語では接語による左方転位がテーマづけ以外の用途にも使われるという事実があげられる。一般には、左方転位はテーマづけのための統語的な手段のはずであるが、ルーマニア語では、さらにその用途が増し、フォーカス (とりわけコントラスト・フォーカス) を置くためにも利用される。次の例では、移動した要素がコントラスト・フォーカスに置かれ、音声的な強調を伴うことになる (音声的に強調されたフォーカスは太文字で示す)。

- (14) **PE MIHAI_i îl_i ajuți, nu pe mine.**
PE M.ACC him.CL.ACC help.2SG not PE me.ACC
「(君は) ミハイを助けてやるのであって、僕をではない。」

(14)の文は、フォーカスを当てるために直接目的語 (pe Mihai) を動詞の前に移動させたもので、義務的な接語 (îl) の繰り返しをもつ。テーマづけのための(11)と同様に、明らかに(14)も接語による左方転位の構文である。このようなテーマづけ以外への用途の広がりも、左方転位が有標性をすり減らしていることを示す現象の一つだと考えられる。

以上、ルーマニア語の左方転位が有標性を大きく磨滅していることを示す二つの現象を見た。このように見てくると、語用論的に無標の SVO が実は左方転位の操作を経てできあがったものであると仮定される現象も、こうした左方転位の有標性の磨滅の一環としてとらえられることがわかる。

結論の前に一点だけ付け加えておいたら、次の文(15)も、主語 (Mihai) にフォーカスを当てるために、(14)と同様に左方転位の操作を施した構文だと考えられる。

(15) *MIHAI mă ajută, nu tu.*
M.NOM me.CL.ACC help.3SG not you.NOM

「ミハイが僕を助けてくれるのであって、君がではない。」

我々は、直接目的語について、(14)がフォーカス化のために、(11)がテーマづけのために、それぞれ同じ左方転位という統語手段を使っているのを見た。異なるのは（イントネーションなど）音声的な実現の仕方である。(14)と(11)との関係は、ちょうど(15)と(10)のあいだにも見られる。このことも、主語をテーマとする(10)の SVO がもともと左方転位を受けた構文なのだ、とするもう一つの証^{あかし}になるであろう。

5. むすび

他の多くのロマンス諸語と同様に、ルーマニア語においても、多様な文脈で広く使えるのは SVO の語順である。言い換えれば、語用論的には SVO が無標の語順である。ただ、統語的な観点からすると、たとえば、統語上の基本構造をより忠実に反映させやすい従属節において、とりわけ、接続法による従属節においては、VSO が基本にあり、SVO は左方転位を適用させた結果であることが統語構造上明らかである。そこで、我々は、ルーマニア語では VSO が統語論的に無標の語順である、という仮説を立てた。すなわち、レーマのみからなる文 VSO が基本にあり、主語であれ、直接目的語であれ、その文中のいずれかの項をテーマづけたい場合には、左方転位という統語手段が使われると推論したわけである。それだけではない。左方転位の構造は、同様の項をフォーカス化したい場合にさえ現れる。ルーマニア語の左方転位には、有標性を大きく磨滅させていることを示すさまざまな現象が見られるが、今あげた現象もそうしたものの一環としてとらえることができよう。

注

- 1) 文が、何について述べるのかを言う部分と、それについて何を述べているのかを言う部分の二つに分かれる場合、前者を「テーマ」、後者を「レーマ」と呼ぶ。
- 2) 鈴木 (2001) では、イタリア語と対照しながらルーマニア語の語順を扱った。本稿は、そのルーマニア語に関する考察をさらに発展させたものである。
- 3) 「フォーカス」とは、一般に用いられているように、話し手が文のなかで話のピントを合わせようとする部分のことを言う。単純化して言うと、フォーカスは、一つの構成要素に限定される場合 (narrow focus) と、広がりをもつ場合 (broad focus) とがある。

- 4) Farkas のあげる最初の例文は VS に続く要素 (in străinătate 「外国に」) が O ではないが、V が S 以外に要素をもう一つもつという点で、ここでは二番目の VSO の例文と同列に考えてよい (このことに関しては、Suzuki, 2010, pp. 38-39 を参照)。
- 5) ルーマニア語における統語論的な無標の語順を VSO と仮定した場合に開けてくる新しい視野に関しては、Manoliu (2011, p. 508) を参照のこと。

参考文献

- Benincà, P. et al. (2001): "L'ordine degli elementi della frase e le costruzioni marcate", in GGIC, vol. 1, pp. 129-239.
- Dobrovie-Sorin, C. (1992): "Les verbes auxiliaires et la structure de la phrase en roumain", in Ramón Lorenzo (ed.), *Actas do XIX Congreso Internacional de Lingüística e Filoloxía Románicas* (Universidade de Santiago de Compostela, 1989), I: *Lingüística teórica e lingüística sincrónica*, A Coruña, Fund. Pedro Barrié, pp. 1123-1134.
- Farkas, D. (1981): "Word order in Rumanian main clauses", in *Folia Slavica*, 4, 2-3, pp. 254-262.
- GALR: *Gramatica limbii române*, vol. 1-2. București, Editura Academiei Române, 2008.
- GGIC: L. Renzi et al. (a c. di), *Grande grammatica italiana di consultazione*, vol. 1-3. Nuova ed. Bologna, Il Mulino, 2001.
- Greenberg, J. H. (1963): "Some universals of grammar with particular reference to the order of meaningful elements", in J. H. Greenberg (ed.), *Universals of language*, Cambridge Mass., M.I.T. Press, pp. 58-90.
- Manoliu, M. M. (2011): "Pragmatic and discourse changes", in M. Maiden et al. (eds.), *The Cambridge history of the Romance languages*, vol. 1: *Structures*, Cambridge, Cambridge Univ. Press, pp. 472-531.
- Niculescu, A. (1991): "L'ordine delle parole in rumeno", in G. Borghello et al. (a c. di), *Saggi di linguistica e di letteratura in memoria di Paolo Zolli*, Padova, Antenore, pp. 289-299.
- Pană Dindelegan, G. (2008): "Subiectul", in GALR, vol. 2, pp. 332-372.
- Renzi, L. (1991): "Considerazioni tipologiche sul rumeno", in H. Stammerjohann (éd.), *Analyse et synthèse dans les langues romanes et slaves*, Tübingen, Narr, pp. 21-25.
- Serianni, L. (1991²): (con la collaborazione di A. Castelvocchi), *Grammatica italiana: italiano comune e lingua letteraria*. Torino, UTET.
- 鈴木信吾 (2001): 「イタリア語とルーマニア語の語順について：語用論的視点からその無標性を探る」『東京音楽大学研究紀要』25, pp. 103-117.
- Suzuki, S. (2010): *Costituenti a sinistra in italiano e in romeno: analisi sincronica e diacronica in relazione ai clitici e agli altri costituenti maggiori*. Firenze, Accademia della Crusca.
- Zafiu, R. (2013): "Information structure", in G. Pană Dindelegan (ed.), *The grammar of Romanian*, Oxford, Oxford Univ. Press, pp. 568-575.